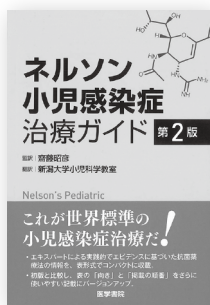


経験豊かな指導医による 回診時の小講義を思い出す

評者 大曲 貴夫

国立国際医療研究センター病院
国際感染症センター長／国際診療部長



ネルソン小児感染症 治療ガイド

第2版

齋藤昭彦＝監訳

新潟大学小児科学教室＝訳

定価:本体 3,600 円＋税／B6 変・312 頁／医学書院／2017
[ISBN978-4-260-02824-0]

評者自身は成人の感染症を専門としている
からも3～4歳以上の小児の感染症診療には

きた。しかし、評者は小児感染症の全体像を学んでいるわけではなく、本物の小児感染症医の先生方とは知識も経験も比較しようもない。本来この書籍はポケットに入れて日常診療のなかで日々役立てるものだが、このような評者の背景もあるため、評者自身は本書を「小児感染症を知るための手引き」として読ませていただいた。

本書全体に一貫しているのは、現在わかっているエビデンスと、エビデンスのない領域を徹底して意識し、それを指針にきちんと反映している点である。特に参考となるエビデンスのない事項に関しては、それを明確にコメントとして示している。たとえば、マイコプラズマによる下気道感染の項目では、「小児における前向きによくコントロールされたマイコプラズマ肺炎の治療のデータには限りがある」との記載がある（本書 p.83）。マイコプラズマ肺炎の治療薬を丸暗記することは誰でもできるが、このような記載には編集された先生方の臨床医としての良心的な姿勢を感じる。また、多くの感染症の治療期間は慣習的に定まってきたものでエビデンスに欠けるが、これもきちんと書いてある。治療期間の設定についてのマニュアルの書きぶりがあまりに断定的であれば、教条的になってしまう。読者がその記載に盲目的に従ってしまえば、診療に悪影響を及ぼす。「定まっていない」ことが明確に書かれていれば、最終的にはやはり全体像を踏まえての医師の判断が必要であることを意識できる。

また、疾患の自然経過についても、各所に示してある。診断と経過観察を行ううえで自然経過を知っておくことは大前提と言えるが、それを学べるテキストやマニュアルは少ない。

加えて、患者の管理上、さまざまな判断が必要となる場合は、いわゆるコツが必要となる場合もある。それがコメントとして随所に記載されているのも、本マニュアルの特徴である。読んでみると、経験豊かな指導医とともに回診を行っていた時の、歩きながらの小講義を思い出す。本書はマニュアルだが、その記載内容は何度も読んでかみしめて、そして考えるべきものであると感じた。なかには、それを契機に自ら研究して答えを求めにいく人もいるのではなかろうか。

本書を監訳された齋藤昭彦先生は、評者の研修先である聖路加国際病院での先輩であり、感染症医を目指し始めた頃からずっとお世話になっている。初版の監訳の序からは、先生の小児感染症医としての修練と、そこで培われた矜持が伝わり、一感染症医として評者も背筋が伸びる思いである。

